

 <p style="text-align: center;"><b>るうてる</b> 箱崎群教会共同体版</p> <p style="text-align: center;">一月報 メッセージと 証し</p>	<p>発行 日本福音ルーテル箱崎教会 代表者 牧師 和田 憲明 〒812-0053 福岡市東区箱崎 3-32-3 TEL (092) 641-5440 / FAX (092) 641-5480 箱崎教会・恵泉幼稚園 <a href="http://www.jelc.or.jp/hakozaki">http://www.jelc.or.jp/hakozaki</a> 聖ペテロ教会・ 奈多愛育園・るうてる愛育園 <a href="https://aikuen.net">https://aikuen.net</a> </p>
---	---

※「証し」(神さまからの自身への働きかけを記すこと)

## 「私の歩んできた道」

Y・I

\*\*\*\*\*

「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」(イザヤ書 46 章 4 節 b)

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」(ヨハネ 8 章 7 節)

\*\*\*\*\*

お早うございます。箱崎教会には、S・KさんやT・Yさんのような大先輩がおられますが、92歳の私もかなりの年寄りですので、証しを仰せつかったのかなと思います。それで、今までの私の歩みを少し振り返らせて頂きたいと思います。

私は、1930年(昭和5年)の1月、東京府豊多摩郡杉並町大字高円寺で生まれました。東京府と東京市が統合されて東京都になったのは、1943年私が13歳の時でした。

私が2歳の時の満州事変から15歳の時の太平洋戦争敗戦まで、いわゆる15年戦争で、私は戦争の中で育ちました。

私が6歳の1936年2月に、二・二六事件が起こりました。いつもは夕方に帰る父が日付の変わる頃に帰って来ました。子供の私も、心配して寝ないで待っていました。父は玄関で靴を脱ぎながら、「大雪で電車が不通になり、歩いて帰って来たので

遅くなった。途中で、剣付き鉄砲の兵隊を大勢見た。あれは何だろう？」と、不思議そうに言いました。剣付き鉄砲というのは、鉄砲の先に銃剣を付けたもので、それを槍のように使って敵を突き殺そうとする、正に敵と戦う姿です。剣付き鉄砲の兵隊を街中で見かけるなんてことは、それまで決して無いことでした。

後に知ったことですが、父が見たのは、その場所から考えて、渡辺錠太郎陸軍大将を襲おうとしていた部隊だったと思われる。

当時陸軍には皇道派、天皇の皇に道と書く皇道派と、制限・指導する統制という意味の統制派、という二つの派閥があり、二・二六事件を起こしたのは、皇道派の一部将校たちと、その部下の兵隊たちでした。渡辺大将はどちらの派閥にも属さない人でしたが、皇道派の真崎大将が、陸軍三大要職の一つと言われる教育總監を更迭された後の、後任の教育總監として着任したので、皇道派に襲われたのだろう、と思われる。

父親が44発の銃弾を撃ち込まれて殺されるのを、目の前1メートルほどの近くで見た、9歳の娘和子さんが、私の入学した小学校の3学年上級にいたことを、ずっと後に知りました。渡辺和子さんは後にカトリックの修道女となり、ノートルダム清心女子大学の教授、学長、理事長を勤めました。晩年の著書「置かれた場所で咲きなさい」は、ベスト・セラーになりました。学校で授業があったのは、中学2年までで、3年になった4月初めからは、農村や工場や海軍の施設に動員されて働きました。

農村動員では、埼玉県のある村で農家に一人ずつ泊めて貰いながら、暗渠排水工事に

従事しました。暗渠排水工事と言うのは、排水不良のため生産性の低い農地の地下に、大きなコンクリート管を連結して排水路を造り、生産性を向上させる工事です。日曜日は工事は休みとなり、世話になっている農家の農作業を手伝いました。鋤（すき）で耕す作業では、牛の引く鋤を操るのはその農家の主人、牛の鼻輪を引いて牛を真っ直ぐ歩かせるのが私の仕事でした。一方の畔（あぜ）には牛の好むものは無かったので、牛は私の引くままにおとなしく方向転換するのですが、もう一方の畔（あぜ）には牛の好む植物が植わっていたので、牛はその葉を食べようとします。私は方向転換させようと、鼻輪を強く引きません。牛は子供の私を馬鹿にしているのでしょう。首を振って角が私の腕に当たり、腕がじーんと痺（しび）れます。それでも強く引くと、牛は方向転換して、またおとなしく私の引くままに歩きました。

その頃は、殆ど毎日のようにアメリカ空軍のB29爆撃機による大規模な東京空襲がありました。特に大勢の死者が出た3月10日の大空襲は、沖縄戦や広島・長崎への原爆投下と並んで、太平洋戦争中の三つの大災害の一つに数えられる大空襲でした。それは、埼玉県の農村に動員されていた時のことでした。東京の方角が真っ赤に見え、翌朝太陽を直接見ても煙のため眩しくなく、太陽が赤く見えました。暗渠排水工事が完了して東京に帰る時、「わが家は残っているかなあ？」と心配しながら帰りました。わが家から中2軒挟んだところにあった家は、敷地一杯の大きな挿鉢（すりばち）状の穴になっていました。わが家は一見無事に残っていましたが、爆弾に直撃された家の土台石が四方八方に飛び、そのうちの二つがわが家の屋根と天井を突き破って部屋の中に飛び込んで来た、とのことでした。

農村動員の次は、高射砲隊で使うレシーバーを造る工場で働きました。ある日の夕方、仕事を終わって帰る時、空襲のため省線電車（今の国電）が不通になり、私は線路の上を歩いて帰るのが一番近道と考え、線路の上を歩いていました。その時、何かがバラバラと私をかすめるように、足元に降って来ました。見ると、縁（ふち）がギ

ザギザの長さ20cmぐらいの鉄片が、十幾つか落ちていました。戦時中の子ですから、私はすぐに、それが日本軍の高射砲弾の破片だと判りました。何千メートルもの上空から降って来るのですから、そのうちの一つでも当たれば、私の命は無かったですでしょう。戦争中、私が最も「恐ろしい」と思った瞬間でした。

高射砲隊で使うレシーバー工場の次は、東京恵比寿の海軍技術研究所に動員されました。旋盤作業に配属された同級生の一人は、作業中に手の指1本の半分を失いました。私は、防空壕掘りの作業に配属されました。何人かの大人の男性が鶴嘴を振るって掘り進み、掘った土をトロッコに載せて、線路の上を土捨て場まで運んで捨てるのが、私ら中学生の仕事でした。掘り進むにつれてコンクリートで固め、防空壕は要塞のようになりました。

その頃は、ほとんど毎晩のように空襲がありました。私の父は日本史の学者で、日本史の中でも特に江戸時代の日本とオランダの関係を専門に研究していました。私の生まれる前1927年から1929年まで、オランダの各地でオランダ側の資料を調査し、その後も日蘭関係の研究を続けていました。毎晩少しずつ書き溜めていた研究結果を、寝る時は大きなリュックサックのような信玄袋に入れて枕元に置き、いざと言う時には何時（いつ）でも持ち出せるようにしていました。ところが、わが家の近くが空襲を受けた時、十何人かの陸軍の兵隊が現れ、「何も持ち出すな。消火の応援に行け」と命令しました。当時軍の言うことは絶対でしたから、父も私も何百メートルか離れた所まで消火の応援に行きました。しかし空襲の火事は、人の力で消せるようなものではありません。火の勢いに押されて後退し、火がわが家の辺りに及んだ時には、兵隊たちは逃げてしまったのか、いませんでした。しかし父の研究結果を入れた信玄袋を持ち出すことは、もう出来ませんでした。その頃、母と弟と妹は岩手県の遠野に疎開し、東大文学部の2年生だった兄は、学徒出陣で陸軍に入隊し、父と2人の姉と私が東京の自宅にいました。夜中ですし空襲の最中（さなか）ですから、4人はバラバラになってしまいました。

た。私は、小さな火が絶え間なく降って来るのを避けるため、燃えているわが家に飛び込み、先ほどまで使っていた自分の掛け布団を引っ張り出して、頭に被って逃げました。布団は、絶え間なく降って来る小さな火の塊を受けて燃え出し、その度に私は靴でその火を踏み消して、また被って逃げました。布団の上に出ていた私の手の指の爪は、燻（いぶ）されて燻製のようになり、その色はその後長いこと消えませんでした。

家を失って後は、神奈川県下の農家や東京杉並区の知人の家に、一間（ひとま）を借りて住みながら、私は動員先の海軍技術研究所に、父や姉たちもそれぞれの勤め先に通いました。戦争末期に、海軍技術研究所のごく一部が都内の別の場所に移り、私もそこに移って合宿生活をするようになりました。

8月15日の終戦を告げる玉音放送は、海軍の将校たちと一緒に聴きました。将校たちは皆日本刀を持っていて、終戦放送の直後は、ヤケになったように、近くの竹藪で太い竹を日本刀で切り倒していました。その海軍の小部隊は、終戦の1週間ほど後に解散し、その日に私ら中学生も解散することが出来て、父と二人の姉の住む一間（ひとま）の借間（しゃくま）に帰りました。終戦後の何年かは、極端な栄養不良のため、歩きながら倒れてそのまま死ぬ人が、少なからずいました。そういう人は、行くという字に道路の路と書く行路で死亡した人ということで、「行路死亡人」と呼ばれました。東京都庁に勤め、当時は都庁の一部署であった杉並区役所に転属配置されていた下の姉は、「今日も行路死亡人が何人報告された」と度々話しました。

父は、東京大学の日本史の教授でしたが、終戦後東大の3人の日本史教授は、全員GHQ（連合軍総司令部）の命令で、教職を追放されました。家を失い父が失業して、わが家はたいへん貧乏になりました。私は高校生で、授業だけは受けましたが、授業が終わると急いで帰宅し、夜遅くまでお茶の行商をして歩きました。買って呉れる家は50軒に1軒も、いや100軒に1軒も無かったかも知れませんが、毎日何時間も歩きましたから、その収入は、貧しい

わが家の助けになりました。その後、私は東大に入学し、家庭教師の職を得て、お茶の行商は止（や）めました。現在92歳の私が比較的健康的なのは、お茶の行商で毎日たくさん歩いたからかな？と思います。大学卒業後、名古屋大学に職を得て、安城市に住みました。その頃全く偶然に名古屋市内のルーテル教会に通うようになり、日曜の礼拝のほか、週2回夕方からの聖書研究・祈祷会にも出席しました。聖書研究会は、牧師先生が一語一句もおろそかにせず丹念に説明し、その後みんなで熱心に話し合う、大学のゼミのような雰囲気でした。キリスト教とは殆ど全く縁の無い家庭に育った私には、たいへん新鮮でした。

「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」（イザヤ書46章4節b）、「神は、そのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子（みこ）を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネによる福音書3章16節）、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」（ヨハネによる福音書8章7節）などの御言葉に、強く引き付けられました。週3回ずつ何年間か通った後、その教会で洗礼を受けました。その教会を含む「東海福音ルーテル教会」は、戦後間もない頃、東京から岐阜までの範囲に存在した10足らずの教会から成る小さなグループで、10年ほどの短い期間存在した後、日本福音ルーテル教会と合同して、現在は存在しません。

私の父は、東京で大学の先生をしながら、岩手県にある天台宗の、世襲の寺の十八世住職でもありました。平素は留守番の人がいるだけでしたが、夏休みや冬休みなどに、寺に帰って住職としての勤めをし、また仏教に関する講演会を開いたりしていました。私は、洗礼を受ける時、寺の住職でもある父の気持ちを思って、それが私には一番辛（つら）いことでした。岩手県のその寺は、今私の甥が二十世住職を務めています。

名古屋大学に勤めている時に、伊勢湾台風がありました。昭和の三大台風の死者・行方不明者は、室戸台風と枕崎台風では3千人台でしたが、伊勢湾台風では5千人を越

えました。私のいた教会でも、被災した人たちに、乾パンや素麺（そうめん）などを配って歩きました。手分けして一人ずつ分かれて歩きましたが、私が歩いた熱田区の辺りでは、家が全く無くなったり、家は残っていても誰もおらず、「その家の人は、皆さん亡くなりましたよ」と、近くの人から言われたこともあり。熱田区の辺りでは、台風に伴う高潮で、貯木場の大きなラワン材が流され、これが家に当たると、家は全壊したり、まるごと流されたりしたので、特に被害が大きかったです。名古屋大学に勤めていた頃、ある人の紹介で、東京の中学校で英語の教師をしていた女性と結婚しました。私は仏教徒の家庭に育ちましたが、妻の曾祖父は札幌農学校の内村鑑三さんの2年後輩で、卒業後熊本県立農業高校の初代校長になりました。その人以来クリスチヤンの家系で、妻の両親も妻も、東京の日本基督教団の、ある教会の会員でした。私の娘のMは、母方を辿（たど）れば、5代目のクリスチヤンです。

私は、九州大学に転勤した後、かなり長く香椎御幸町に住みました。妻は、東京の教会で勧められた日本基督教会、教団でなく教会の、福岡動物園の近くの丘の上の教会に転入会しました。私は転勤直後で大変忙しかったものですから、名古屋のルーテル教会に籍を置いたまま、時々妻と一緒に妻の所属する教会に出席していました。長男のTと長女のMは、恵泉幼稚園に入園し、未だ幼稚園バスが無かった頃で、私が九大に通う時に、九大の隣の恵泉幼稚園に連れて行き、それから研究室に行きました。二人とも3歳の年少組からお世話になりました。

香椎に17年間住んだ後、福岡町（今の福津市）に転居し、教団の津屋崎教会に妻と一緒に転入会しました。

妻は、福岡在住中に、50代半ばで、がんのために召されました。

素子は箱崎教会の青年会でもいろいろお世話になり、S先生から洗礼を受け、結婚式

の司式もS先生にして頂きました。私は妻が召された後も、福岡に住み、津屋崎教会に通っていました。西区愛宕浜の現在の住まいに転居した後も、何年間か津屋崎教会に通っていましたが、2007年に箱崎教会に転入会させて頂き、ずっと前から箱崎教会の会員だったMと共に、親子でたいへんお世話になっております。これからも、宜しく願い申し上げます。今日は拙（つたな）い話を聴いて下さり、有難うございました。

\*\*\*\*\*

## 【おしらせ】



- 毎週の礼拝は、いつでも（一度だけでも）、どなたでも（信徒でなくとも）自由にご参加できます
- 子どもたちには、教会学校のように「こどもへのおはなし」があり、「祝福」をいたします
- 礼拝堂の見える隣の部屋を安心して自由にご使用できます

【エアコン・音響完備】



ご不明な点は、  
牧師まで気軽に  
おたずねください

## I 先生さようなら

H・Y

9月10日、I先生は、天国へ旅立たれました。

私たちの大好きな、I先生さようならです。伊藤先生は、永年にわたり幼稚園で、勤められました。見えない神の愛を信じ、目に見えない保育の業を積み上げてこられました。見えないものは、なかなか他の方には、受け入れてもらえないものですが、でも確かに神の愛はあり、保育の業で実ったものはあったのです。お別れの式に参列された方々の数の多さに愕然とさせられました。一重に、I先生の生きた証し、心をつくし、身をもって保育の業に携わったその証しだと思います。見えないものを見える化したその瞬間でした。

「姉は、家族のあいだでは、あまり、幼稚園の働きを話しませんでした。」と、ご家族の方から聞きました。建築をなさっておられたご家族にとっては、働きの成果は建物として残る。しかしながら、保育の成果は目に見えないので、わかりづらいのだと思います。でも、確かにあったのです。お別れの式は、そのことをはっきりと示していました。

私たちは復活の信仰に生きるものです。

「闇は光に勝たなかった」ヨハネによる福音書1:5です。死は復活に勝たなかった。死は終わりではありません。ですから、私たちは必ず再び先生とお会いできるのです。その時まで、さようなら。

先生、たくさんの楽しい思い出をありがとうございます。先生の手紙を胸に、ありがとうございます。さようなら。



## 追悼 Y・I先生

A・F

私とI先生との出会いは、恵泉幼稚園に勤めることになった35年前。長きにわたり、幼稚園と教会で大変お世話になりました。私にとってI先生は、幼稚園教諭としても信仰者としても、常に尊敬する憧れの先生でした。幼稚園で教えて頂いたこと、また思い出はたくさんありますが、先生お得意の「おはなしのろうそく」の素話や、年長組の夏のお泊り保育の折に、自然の中で行われる朝の礼拝で「小さな虫や花々を見てごらん。神さまからいろんな知恵と工夫を頂いて生きているよ」と、小さなものを通してあらわれる神さまの愛について語られるのを、子どもたちと一緒にワクワクして聞いたことを思い出します。I先生のように保育ができたなら！子どもたちと共に過ごせたら！と願っていましたが、なかなか思うようにはいきません。一緒に保育をしながらも、私は伊藤先生のクラスの子どもになりたい！！とさえ思っていました。先生の保育は、常に優しさであたたかな愛にあふれていて、それは保育のみならず信仰者としても、日頃の交わりの中でも感じることでした。

時を経て、再び教会学校でご一緒させて頂き本当に感謝の日々でした。その中で、先生のご病気や体調の事をお聞きする度に、私の方が「どうしよう…」と動揺しうろたえるばかりでしたが、先生はいつも「インマヌエルの主が共にいてくださるから…」と変わらず明るく過ごしていらっしゃいました。5月に家にあるものを整理しているとお聞きし「J・N先生から頂いた素敵なオルガンがあるのよ。良かったらもらってくれない？」また、神学部での学びに役立つものがあれば…とSにも「本を見にいらっしゃい。」と声をかけて頂き主人とHさんと4人で先生のお宅にお邪魔して、久しぶりにゆっくりおしゃべりしながら皆でサンドイッチを食べたのが直近の思い出です。

いつかお別れの日がくる。その時に備

えよ。心づもりはしていましたが、こんなにも早く来ようとは…。気持ちの整理はつきませんが、私が最後に先生のためにできること。お別れの式の為に、先生に頂いたオルガンで奏楽の準備をしました。先生とのお別れに、今までの感謝を込めて選んだ曲は

前奏 カルヴァリーへの行進 (J.ステイナー)

献花 ニムロッド (エルガー) 英国エリザベス女王・フィリップ殿下下葬儀でも使用された1曲

後奏 あなたがそばにいてくだされば BWV508 (J.S.バッハ/シュテルツェル原曲)

歌詞～あなたがそばにいてくだされば  
歓喜のうちに私は死を迎え 永久の憩いへと赴きましょう 私の最期のとき 私の信仰の瞳を あなたの美しい御手が閉じてくださるなら

ああ！私はどんなに幸福でしょう～

病の中では、痛みも苦しみも沢山あったことと思います。今はその全てから解放され、インマヌエルの主に手をひかれて安らぎの中にあられるでしょう。全てを整えて旅立たれた先生。いつも私たちの行く道を示してくださり本当にありがとうございました。先生、またお会いしましょう。御国での再会の日まで……

\*\*\*\*\*

## H・Yさんを覚えて

和田憲明

8月24日に召されたH・Yさんは、自分には「教会しかないこと」をご家族に伝えられていたそうです。米寿のお誕生日に姪のお二人が入院先を訪れた時のこと。その時、まるで「遺言」のように最後の葬儀のことをご家族に語られたと聞きました。教会で葬儀をあげてほしいという願い、そして「出来れば…」と恥ずかしそうに「教会の方々も一緒に」と言われたそう

です。その後入院生活を続けられる中で認知もすすむ中、ある日姪の方が讃美歌の入ったオルゴールをプレゼントされました。はじめ、Hさんは何の興味を示されなかったそうですが、姪の方が「ほら、これがイエスさまで、こっちがマリアさん、開けると讃美歌が聞こえるでしょう」とオルゴールの絵を指差し開いた途端、ギュッと握り胸に抱きしめられたそうです。その後、天の召しを受けられました。葬儀は比呂さんのご希望どおり姪のお二人と教会の信徒の方々と共に式を執り行いました。出棺に際して皆が見送られる時に姪の方が「まあ、こんなにも多くの人たちに見送られて叔母は今頃、天国でスキップでもするように喜んでいらっしゃるでしょう！」と感極まるようにおっしゃられたことは忘れられません。Hさん、じつは戦前の恵泉幼稚園に通われておられました。幼き日にその胸に撒かれた福音の種はしっかりと根を張り、実を結ぶごとく告別の日を迎え、ご家族と神の家族に見守られ送り出されたのです。

全聖徒主日礼拝の日(11月6日)、あらためて思わされたことは、箱崎教会の天井から吊り下がる十字架を中心に、半円を描くように座っている反対側には目には見えないもう半分の天の国の半円があり、永遠の輪を描く交わりが与えられていることです。礼拝の中で献花をする際に、礼拝堂中央入口前で一輪の白いデンファレを受け取り、前列の72枚のお写真を前に手向けます。ご遺族の歩かれた位置から見えるのは、真ん中の通路(縦棒)と聖壇上のカーブしている焼きレンガの壁(横棒)が遠近感覚で現れる大きな十字架です。そして背にした教会の庭先には記念堂(納骨堂)が佇んでいる。この日、十字架と復活に思いを馳せながら、今一度神さまの約束のみ言葉を心に刻みました。「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初ものは過ぎ去ったからである」(ヨハネの黙示録21章4節)。